



R. I. 第2630地区 高山中央ロータリークラブ
WEEKLY REPORT

2009～2010 年度 高山中央 RC 会長テーマ 「 聞・思・修 」

◆会長 橋本 修 ◆幹事 岩垣津 亘 ◆会報委員長 長瀬 栄二郎 ◆会報担当 久々野 国良

創立 1991 年 5 月 20 日

◇事務局 高山市花岡町 1-15 丸越商事 4F
TEL:0577-36-0730/FAX:0577-36-1488
◇例会場 ひだホテルプラザ 3F/TEL:0577-33-4600
◇例会日 毎週月曜日 PM12:30～
◇ホームページ <http://www.takayamacrc.jp/>

<出席報告>

	会員数	出席会員	出席	Make-up	出席率
本日 831 回	49 名	46 名	39 名	—	84.78%
前々回 829 回	49 名	46 名	40 名	3 名	93.48%

<点 鐘> 会長 橋本 修
<ソング> それでこそロータリー

<本日のゲスト>

高山市民時報社

代表取締役 小鳥 文乃 様

<本日のビジター>

高山西ロータリークラブ

中林 和夫 様

小田 博司 様

<会長の時間> 会長 橋本 修

石川遼君は頭がよさそうで、素直で、優しくそうで、誰とでも慈愛の心を持って接する態度は、とても 19 歳とは思えない青年だといつも感心しています。

溝際清太郎君も、冷静沈着に対応する姿は、安心感をあたえました。誠実さと優しさをもった深きまなざしは、育てられた家庭そのものの様に感じました。

25 歳にして立派に喪主を努められました。3 代目としての資格を父親から全て、申し送りをしたかの様にしっかりと受け継がれていました。



清嗣さんの人柄がしのばれるお別れの 2 日間でした。短大講堂を埋める大勢の参列者は、遠方から平日にもかかわらず、かけつけられました。あらためて愛されるという事は、どういう事かと言う何かを学ばさせていただきました。私もおよばせながら、一歩でも近づける様、今日から無理を

承知の上で、尊敬される人に大改造を始めようと思います。ご指導の程よろしくお願い致します。

先週 R. バンド発表会に向けて、新曲 4 曲もチャレンジしているお話をしたかと思ひます。が、なんとその中の 1 曲をやむなく中止しなければならない事態となりました。

「何も言えなくて…夏」ボーカルの中村耕一が麻薬で捕まったのです。プロフィールには、髭をたたえた細身の風貌がキリストに似ているとも言われていると書いてありました。キリストですよ。又、バンド名の JAY.WALK は「赤信号を歩いて渡る」と言う意味つまりは信号無視又、危険地帯に足を踏み入れる事を意味する英語のスラング「Jay walking」だそうです。又、中村は緊張しやすく、ステージで完全に歌詞を忘れてたり、トーク中に何を話しているか分からなくなる事がままある。と載っていました。かなり前から、常用していたのかと妙に納得もしましたが、針山君はせっかく一生懸命覚えたのにとボヤいていました。

さて、本日は、私と同じ年昭和 23 年に発刊されました市民時報社の社長さんに来ていただいております。先週の 6510 号を拝見した記事の中に懐かしい思い出の場所が載っていました。天満宮のトチなど 5 本が高山市の保存樹に指定されたとの事、近くで育った私は、神社の境内は子供の時の遊び場所でした。杉玉鉄砲とトチの実取り、杉葉集めなど、又、相撲に野球と、ほとんど毎日通った場所でした。記事を読み懐かしく思いました。

地元に着した地方紙は、生活の中に溶け込み、週三回ポストを開けるリズムを刻んできました。時代の変化の中で変わらず情報を発信しているご苦労も多々あるかと思ひますが、本日は色々な裏話など楽しみにしております。よろしくお願い致します。

<幹事報告> 幹事 岩垣津 亘

◎国際ロータリー第 2630 地区 ガバナーエレクトより
・2010 年地区協議会開催に伴うご協力をお願い

○ロータリー米山記念奨学会より
・ハイライトよねやま 121 号

<本日のプログラム>

広報/雑誌委員会 高原 清人 委員長

テーマ「地方紙の持つ意義」

高山市民時報社

代表取締役 小鳥 文乃 様

こんにちは。只今ご紹介いただきました株式会社高山市民時報社の小鳥文乃でございます。本日は、私のような者の話を聞いていただく機会を設けていただきありがとうございます。



このような経験は初めてですので、相当緊張しています。また男性ばかりなのでどうしていいやらという感じです。食事もう喉を通りませんでした。

「当社の歴史や今後の意気込みなどを話してください」とのお話をいただき、最初はお断りしたのですが今後こういったことは避けてはとおれないという思いとみなさんに私の存在を知っていただき、今後色々指導いただけるのであれば、私にとっても会社にとってもよいことかと恥をさらしに参りました。

言い訳ですが、産休の社員が予定より早めの産休に入ったためその仕事の補助にまわり、あまり練習できませんでした。話の内容もかなり固く、たぶん笑えるようなところはありません。その上棒読み状態で聞き苦しいと存じますがしばし我慢して聞いていただければと思います。

今日は、会社の歴史と高山市民時報の紙面について、私のひとりとなり、そして当社の今後についての三つを、先代の四方山話やその他の裏話などを交えてお話ししたいと思います。

ではまず、当社の歴史についてお話ししましょう。

当社は、昭和 23 年 3 月 1 日創刊で、2 年前の平成 20 年 3 月 1 日、60 周年を迎えました。創業者は、真木潔、昭和 59 年には、現会長、小鳥幸男に引き継がれ、株式会社となりました。また、平成 16 年 12 月には、私が社長に就任しました。私が社長となって今年で 5 年目を迎えます。

当社は、「飛騨高山で一番読まれている新聞」を目指しています。地元に着した内容、公正で高山市の出来事がいち早くわかる新聞、そして飛騨の人々を一人でも多く紙面に登場させることが大切な使命であると考え実践しております。

また、当社の業務として、「クロノス」という折込チラシ

の発行もやっております。クロノスは、全国的にもめずらしく、1 枚しか挿まない折込チラシとしてクライアントにも読者にも効率的と多くの皆様に御利用いただいております。また書籍出版の業務も致しております。これまでに自社では約 65 冊、自費出版のお手伝いとしては約 15 冊の発刊をしております。担当は、元本紙の編集長をして居りました者ですので、確かなアドバイスができるのではないかと思います。中でも、50 周年記念の際、3 年の月日をかけまして発刊しました「飛騨人物辞典」は、当社としては一番誇れる出版物と自負しております。資料蒐集から発刊までには大変な苦勞がございました。皆さんもぜひ手に取ってご覧いただければと思います。高山市民時報社は、今では日刊紙でも当たり前のようになっているおくやみ欄を日本で初めて掲載した新聞でもあります。また、お誕生欄では、皆さんがまず知りたと思われる親の名前を先にしており、最近大変読むのが難しい子供さんの名前にはルビを打ち、読者にとってわかり易い表記にして、他紙ではしていない形で掲載しています。

全国でもこのような形で市民に密着している新聞は珍しく、地元紙として長年やってこられたことは、大変誇りに思っています。しかし、時代の流れで日刊紙を含む新聞業界は、部数確保と広告収入について、いまや厳しい状態です。ですが、当社は、独自の社風をもって歴史を守りながらも時代の流れに沿って一層の発展を目指して全社を挙げて努力しています。

「子猫差し上げます。」「子犬差し上げます。」「鳥が迷い込みました。」「鉢植えが盗まれました。」「自転車放置してあります。」など本誌は、落し物欄など極めて地域に密着した内容でいくつものお困りごとを解決してきました。

また、このような小さな新聞社ですが、ほとんどを直接配達しておりますことも大変な苦勞ではありますが、実践しております。一部郡部を除いて古川、国府、丹生川、清見、宮、久々野など独自配達が困難な地域も当日の配達をする努力をしております。配達して下さる方は 100 人ほどにもなります。

先々代の真木潔をご存じない方はいらっしゃいますでしょうか。真木潔は、元毎日新聞の記者をしていましたが、高山に戻り、地方新聞を創刊したのです。第 1 号の新聞には、次のように書いてありました。

市役所をはじめ各官公省や会社から、ぜひ市民に知らせたいことは全部この市民時報にのる。市の広報はもちろん配給のことも税金のことも県の通達も警察や局や税務署や学校や駅などのお知らせがみんな載るし、また商店や工場からのお知らせでも市民の利益になることでしたら利用していただいているのです。「便利に役に立つ市民時報」つまり高山中の回覧板を全部まとめたものです。ぜひ知っておかねばならぬ身近の出来事も載るし、市からの通知や配給のことのほか紙面の許す限り市民の声、相談、地元問題の解説、読み物、市民文芸なども載せます。「どの家も読んでください。」これは都合のよいものが出来たとほめていただけると信じています。用紙不足の時代ですから皆さんのためになる回覧板です。今申し上げました内容は、今現在でも同じような気持ちでおりますので、長くなりましたが原文のまま、お伝えしました。

創業者というのは、志が大きく偉大であると考えます。自分のやりたいことを実現するためには、想像を超えた苦労があったことと思います。奥さんと二人三脚で高山市民時報の礎を築かれたのです。当時めづらしい新聞として暮らしの手帳にも紹介されました。

私は真木さんの時代から当社にお世話になっているのですが、真木さんについて印象に残っている話をいくつかいたしましょう。

まずは、えび坂下のさんまち通りにあります盛光堂印店というお店の話です。今でも広告主として大変お世話になっておりますが、この店の電話番号は真木さんが決めたというのです。電話番号は 32-0867 なのですが、先代のご主人がたびたび病気をなさるので「やむな」という意味をこめて 0867 にしたと言うのです。店の方に以前その話をしましたら、初めて聞いたとおっしゃっていました。

他に、こんな話もあります。これは当社発行の縮刷版にあったのですが、新聞なのになんと「記事がないので次回は休みます。」という当時だからこそできた記述があるので。

又、金子一平さんが亡くなられた時、号外を出さんならんと会社の前で右往左往して見えた姿が今でも目に焼きついています。

先代の社長はみなさん、よくご存知の通り、私の父であり、現会長であります小鳥幸男です。私は、よく会長と顔がそっくりだと言われますが、心中は少し複雑です。会長は、真木さんの時代には、週に 2 回のペースで大判 1 枚、小判 1 枚を発行していたものを週 3 回のペースで毎週大判 3 枚との小判 1 枚を発行し、大きく紙面を拡大いたしました。発行部数は、当時 8 千部だったものを現在では約 1 万 6 千部と約 2 倍にしました。従って、広告効果も倍増しましたが、料金は当時のまま据え置きです。

また、当時のチラシはカラー印刷が主流でない頃、クロノスというチラシの発行も始めました。

会長はまさに実行の人でしたので、会長先導のもとで社員は、指示に従い、一丸となって頑張ってきました。

それではここからは、紙面が出来るまでについてお話しましょう。

当社には記者が今現在 4 人います。4 月には、女性記者の入社を予定しており、5 人となります。記者たちが毎日、取材してきた内容と各所から寄せられた情報、そして連載などを発行当日編集長が割り当て紙面が出来るわけです。記者が記事を書くときに大切なことは、まず結論から書くことです。今から何についての記事が書かれているかが読者に読み始めにわかると読む人に負担をかけないのです。また、編集長が編集をする際、文章を削らなければならない時には、最後からカットしていくと言うのが基本だからです。記事の内容に関しては、編集長一人の感覚だけに偏らぬよう記者全員の合議によるように強く指示しました。当紙面の半分は広告ですが、これは広告担当部署が予め製作をしています。広告面は、地元の方が多く利用されておりますので記事と同じ位大切な情報と受け止めております。市民時報においては、広告もニュースと同様なのです。今、この町でなにが起きているのかというのが、火災発生時のお詫び広告や死亡通知などでしょう。このような広告

にも当日ギリギリまで対応できる新聞は他にはないでしょう。

時々「広告が多いな」という意見もございますが、法令の規定どおりのスペースを正しく守っておりますし、これがなければ当社は、発行が維持できないということです。これは、テレビや日刊紙も同じことです。紙面が小さいため、印象として多く感じられるかもしれません。

次に私についてお話ししましょう。私は昭和 58 年 4 月に当社に入社しました。当時の社長は真木潔で、その後、父が入社し社長となりました。何の自慢にもなりません……当社での勤続年数では、会長よりも私のほうが先輩となります。

入社当時の私の主な仕事は、新聞の配達に関する業務のほか、今のようにパソコンが普及していませんでしたので、購読料や広告料の請求書や領収書を書くといったものでした。その他お茶を入れたり、掃除をしたり出来ることは何でもしていました。高山風に言いますと私は、いせきない人間ですので、仕事がすぐ終わってしまい、「何をしたらいいですか。」と先輩に言いますと「草むしりでもしなさい。」といわれたこともありました。

少ししてから真木さんから、「君は今日から広告の仕事をしなさい。」といわれ、広告全般の仕事をするようになりました。その頃の私は、その仕事を社内では、記者につぐ華やかな仕事のように感じていましたので、うれしくてうれしくてしょうがなくとにかく夢中でやりました。その仕事をしていた時、私が最も自慢できることは、市内の広告主の電話番号を少なくとも 100 件以上は軽く暗記していたことでしょうか。当時の市民時報は、まだ活版印刷の時代でした。と言っても殆どはもう写植が主流になりつつある時代でした。ですがまだ印刷所の都合で活版印刷で作成をしていましたので色々な制約があり大変でした。その後、あっという間にパソコンで作成をする時代となり、今では、素人でもパソコンで何でも出来る時代になりました。

こうして二十余年、社員という感覚で長い間仕事をしてまいりましたので、会長が病気で倒れても、まさか自分が社長になるとは思いもせず日々を過ごしていました。会長が病気で倒れたとき、私の姉がすでに一緒に仕事をしており、経理全般をしておりましたので、姉が社長になり、やってくれるだろうと高をくくっていたのです。ところが、ちょうどそのとき、姉も体を壊し、私に白羽の矢が当たったのです。想像もしていない状況でしたので、その後の私の混乱はご想像通りでした。社長の「社」の字も経営の「右、左」もそして行政についても浅い知識しかないわけですから、何をどうして勉強してよいやら大変悩みました。まず、私がしたことは、社内美化活動でした。それまで当社は、来客者を接客するまともな場所がなかった上、椎名誠の小説に出てくるような昔ながらの決してキレイとは言えない事務所でしたので、入り口に受付コーナーのカウンターとテーブルを設けたり、社内の配置換えをしたりなどを行いました。社員の部署転換などもしたため少しの混乱はありましたが、社員もよく頑張ってくれて、今になってみると正しかったと思っています。そして、行政の入門書、高山市の条例、リーダーとは何かについての本、経営に関する書物から決算書の読み方など死ぬほど読みあさりました。

ひょっとしたら今までで一番集中して勉強ができたかもしれせん。

市議会の傍聴もしましたし、苦手な集いにも積極的に参加し、沢山恥をかいてきました。ストレスで体調をくずしたり、一時は体重もひどく太ってしまい、最悪の状況でした。その上、社内で会社を先導する立場において、私は年齢的にも一番若く、年配者に指示をする立場になったわけですから、それはそれは大変でした。抵抗に合い、おもうに任せないことで激昂することもありました。また、外にでると会長と言う大きな存在がひどく重く感じられ、少し背伸びをしていたように感じます。あまりにも決断することが多く、会長の偉大さをこのとき、特に実感したのです。会長に、色々相談しますと、「おまえの好きなようにやれ」「経験しかないさ」と任せてくれる心の広さを感じたり、逆にもっと助言して欲しいと、心もとなく感じることもありました。が、「よーがんばるとるな」「おまえらしく やればいいんやさ」「そんなに頑張りすぎるな」というおべんちゃらや助言に励まされ今日までなんとかやってこられました。この時の言葉で一番心に響いたのがやはり「おまえらしく やればいいんやさ」というものです。この一言でストレスが全て消えていくような感じがしました。確かに「私は私でしかないのですから」。お陰で今は精神的にも鍛えられ、充実し、本当に少しですがダイエットもでき、心身ともに健康で自分の思いが定まり、惑わされることが少なくなってきたように思います。また、父でも解決できなかった問題もいくつか自分なりに解決できたと思っています。会長からは「おまえでないと出来なんだ。」とほめてもらい少しの充実感とともに、尚一層気の引き締まる思いがありました。

決して誰でもが経験できることでない立場にたたせてもらえたことに今では感謝しています。私にできる使命は何だろう。我を捨て会社のためにできることを精一杯やり抜こうと毎日励んでいます。今は、姉の健康も回復し、二人で力を合わせて一つ一つ問題点を洗い出し、解決をしています。

「素直に五感を駆使すること、相手の話をよく聞き真実・事実・意見を見極めること」。社長としての私は、社員に対してこうしたことを望んでいます。そのために次の 7 つのことに特に気をつけています。

1. 読者の立場に立ち、読みやすく、わかりやすい紙面づくりをすること。
2. 中立な考え方をすること。
3. 小さな紙面ではあるがどれだけでも多くの記事項目を掲載すること。
4. 高山市民のほとんどが読者であったり、広告主であると考へ、一人でも多くの市民を紙面に登場させること。
5. 情報をお寄せくださる皆さんに親切な対応を心がけ、十分に話を聞くこと。
6. 相手の人によって態度を変えることなどないように公平に対応すること。
7. 正しい情報を伝えること。です。

記事は時として要望にこたえられず、お断りするときもあります。そういったときは「よくお伝えいただきました。」

「ご来社いただきありがとうございます。」と言葉と態度で伝えるよう社員に指導しています。私が社長になる前は、記者のこういった配慮が、なかなか浸透していなかったのです。

昨年からは 44 歳の若い編集長に変わり、当社の随分平均年齢が若くなりました。紙面構成や高山市の新年度予算などをクローズアップし、市民が普段あまりよく理解していないものの解説などにも懸命に努力しているようです。

当社は今後どう変化していくべきか。

今それを全社を挙げて、少しずつですが改善したり、色々な挑戦もしようと日々精進しております。ぜひ、楽しみにしていただければと思います。

高山市民時報には 3 つの日本一があります。

その 1 は、日本一紙面の小さい新聞

その 2 は、普及率の高さ

その 3 は、購読料は 630 円という日本一紙代の安い新聞です

どうぞ皆さんも当紙を可愛がっていただき、色々な情報をお寄せいただいたり、意見もお聞かせください。もし当紙を読んでみえない方がみえましたら、購読下さるよう勧めさせていただきますようお願い致します。また広告のご用命もいつでも賜ります。

少し会社の宣伝も入り、つたない話でしたが、当社のことが少しでもわかっていただけ、地味ですが私も顔も、みなさんに覚えていただけましたでしょうか。

今後どこかで私を見かけられましたら、気軽に声をお掛けください。

今日はお聞き苦しい話を聞いていただきどうもありがとうございました。



<ニコニコBOX>

お世話になります。今年初めてのメイクアップです。宜しくお願いします。

高山西ロータリークラブ 中林 和夫 様

久々のメイクアップです。宜しくお願いします。私も旧朝日村在住です。記憶の隅において下さい。

高山西ロータリークラブ 小田 博司 様

本日の講師 高山市民時報社 代表取締役 小鳥文乃様のご来訪を歓迎申し上げます。お話を楽しみにしています。また、高山西RC 中林和夫様 小田博司様のご来訪を歓迎申し上げます。

理事役員一同

高山西RC 中林和夫様 小田博司様のご来訪を歓迎致します。

松之本さん 昨日は娘さんのご結婚おめでとうございました。

永家 将嗣

高山西RC 中林和夫様 小田博司様のご来訪を歓迎申し上げます。また、結婚記念日の大きなケーキ美味しかったです。

新井 信秀

高山市民時報社の代表取締役 小鳥文乃様のご来訪頂きありがとうございます。お話を楽しみにしております。

高原 清人 今井 俊治

3月14日のホワイトデーに長女美都の結婚式と披露宴が無事終わることが出来ました。幸せになってほしいと願っています。

松之本 映一

先日創業57周年謝恩セールをさせていただき、たくさんのお客様にご来店頂き有難く思っています。来年も売出しが出来る様頑張っていきたいです。

谷腰 康夫

我が家の大事な大事なクゥーたんの初七日がすみました。多くの人にご心配を頂きまして本当にありがとうございました。岩垣津さん 永家さんお花をありがとうございました。今は新しいサーちゃんが来ましたので我が家はてんてこまいです。感謝・感謝。

島 良明

先日は家内の誕生日にきれいな花を頂きありがとうございました。

久々野 国良

先日は、妻の誕生日にお花を頂き誠にありがとうございました。花束は嬉しいようでしたが、年は一時忘れたいようでした。

高原 清人

先週の例会において、誕生日お祝いを頂きありがとうございました。

昨日3月14日は、54回目の誕生日を無事迎える事ができました。ありがとうございました。

水川 巧

先日は、結婚記念日にケーキをありがとうございました。岐阜での会議に家内も同行し結婚祝いもして満点夫でした。宿泊した大垣のホテルで、朝、なんと伊藤さんに出会いビックリ！常々品行は方正にしておかなければと思います。ちなみに、伊藤さんはお一人で宿泊でした・・・と思います。

大保木 正博

土曜日、大垣でお祝いがあり宿泊して参りました。ホテルのレストランの朝食で見かけた顔がありました。大保木さんです。隣には、きれいなご婦人がいらっしゃいました。残念ながら奥様でした。私はもちろん一人でした。良かった事としてニコニコへ。

伊藤 正隆